

# キャリア教育の手法としてのキャリアインタビュー

平尾元彦

## 要旨

キャリア教育の一手法としてのキャリアインタビューについて、山口大学での実践および学生へのアンケート調査結果を報告する。この課題を体験した学生には少なからずキャリア意識の変化がみられ、同手法の有効性が確認される一方で、課題の趣旨や親をインタビュー相手に推奨することの意義をより明確に伝えること、取材して書くことには個人差が大きいことについて書き方に関する指導もあわせて行うべきことを課題として指摘する。

## キーワード

キャリアインタビュー，キャリア教育，親，アンケート調査

### 1. はじめに

学校教育において“キャリア”の重要性が高まるなかで、小学校から大学まで各段階でのキャリア教育が試行され、様々な手法が模索されている。本論文は、このキャリア教育を効果的に実践するための一手法として注目される「キャリアインタビュー」に焦点をあて、山口大学での実施結果を報告するとともに、その有効性を考察するものである。キャリアインタビューは、大学生のよりよい職業選択に、またキャリア形成に貢献するものだろうか。同手法の効果と問題点を明らかにすることで、手法改善への提案を行いたい。

### 2. 学校教育とキャリアインタビュー

一般に、キャリアインタビューとは「ある人物のキャリアを聴取して有効な施策へと反映させる」ための手法であり、労務管理の現場では、所属長（あるいは人事部）が社員にインタビューをして、何をしたいのか、どこ

で勤務したいのかななどの希望を聞きだすものとされる。社員に自分のキャリアを意識させると同時に、社員一人一人の力を引き出すことで生産性を高める経営手法として、この言葉を使うかどうかは別にしても、すでに多くの会社で実践されているものである。

学校教育におけるキャリアインタビューは、この意味とはやや異なる。すなわち職業人へのインタビューという点では同じであるが、その目的は生産性向上ではなく、学生・生徒の職業意識向上の観点からとらえられるべきであろう。ここでの職業意識の向上には、進路の明確化や働くことへの意欲の向上、自らキャリアを考えるための方向づけなどが含まれる。

では、学校教育においてこの手法がどのような効果を発揮するのだろうか。日本国内で実施された2つのキャリアインタビューの実践報告を紹介したい。

ひとつは、千葉県柏市柏日体高校の実践である（斎藤 [2003]）。同校では総合的な学習の時間の柱として進路学習を実施し、このなか

でキャリアインタビューが実行される。ここではまず、1年生の最初に保護者が生きてきた昭和の時代の記録映像などをみて時代背景や文化を学び、グループ討論を行うが、これは保護者が語る内容をより具体的にイメージできるように工夫したものである。キャリアインタビューはこの後に実施され、インタビューの相手は父母である。取り組みを実践した進路部長の井上は、「進路意識や職業観を身につけるといふ狙いでは、思った以上の効果があったと思う。それと同時に、インタビューを通して親子のコミュニケーション副産物が生まれたことの意義は大きい」とその成果を語っている。同校の実践は保護者とのコミュニケーションを円滑にすることで生徒の進路意識の形成を図ることを強く意識したものとなっており、ここで採用されたキャリアインタビューは高校生の職業意識向上に貢献したことが報告されている。

同様に総合的な学習の時間を使った埼玉県立浦和東高校の試みは、小林[2002]に紹介される。進路指導の一環として進路探索ワークを取り入れ、それを実施したうえで生徒自信が調べてみたい職業のなかからインタビュー相手を自分で決めるといふものである。対象として親は不可としており、①職業選択の幅を広げるため親以外にアプローチさせたい、②発表させるとなると親の職業調べになりかねない、という点をその理由にあげている<sup>1)</sup>。

何を目的として、誰にインタビューするのかという観点から整理すると、両校とも生徒のキャリア形成という目的は共通するにしても、柏日体高校では進路意識と職業観を身につけるために親をインタビュー相手とするのに対して、浦和東高校は仕事を理解することを目的として自分の興味ある職業に就いている人をインタビュー対象とする。もちろん自分の興味のある仕事、調べたい仕事が親の仕事である可能性は十分に考えられるが、やは

りこの両者は課題設定において分けて考える必要があるだろう。

浦和東高校で実践された職業人へのインタビューとなると、人選の問題が発生する。なりたい職業に就いている人にインタビューできれば理想的であるが、実際に働いている人に時間をとっていただかなければならず、実効性は困難と言わざるをえない。一方、親であればインタビューに応じてくれる可能性は高くなると考えられるが、親の職業と自分になりたい職業は、通常は別物である。また、実効性は高いとは言え親にインタビューができないケースも存在しうる。この点の配慮も必要になってくる。

ところで、昨今の若者による職業意識の低下要因として、親の仕事がみえにくくなってきたことを指摘する意見は根強い<sup>2)</sup>。高校生にしても大学生にしても将来の進路は本人が考え決定するものとはいえ、保護者の影響力は非常に大きいことは間違いない。親へのインタビューには、職業を知ること以上に親の考え方を理解すること、かつ、アドバイスをもらい就職活動に結び付けていくことが望まれおり、キャリアインタビューはこれを実現するひとつの手法として期待されている面もある。

### 3. キャリアインタビューレポート ：山口大学の実践例

山口大学では2000年より共通教育にキャリア関連授業を設け、キャリア教育に力をいれてきた。2004年度は、低学年向けの主題別科目「キャリアデザイン」(後期開講)高学年向けの総合科目「就職」(前期開講)に分け、キャリアインタビューは、高学年向け講義の中間レポートとして実施した。

総合科目「就職」は「就職活動の前に知っておくべき知識を身につける」をコンセプトに、山口大学の経済学部および産学公連携・

創業支援機構、大学教育機構に所属する教員ならびに山口県若者就職支援センターの講師によるリレー講義として開講したものである。労働経済論、財務会計論などの専門家や民間企業出身の教授が実体験に基づき講義を行った。受講対象は人文・教育・経済・理学・農学の各学部3年生以上であるが、開講時間が実習と重なったため農学部学生の履修者はいなかった。300名を超える受講生による大教室の授業である。講義では、知識を獲得するメニューのほかに、就職活動につなげていくために3つの課題レポートを課した。最初に「キャリアインタビュー」、続いて自分の棚卸をするための「キャリアシート」、そして最後に自らの将来を描く「キャリア宣言」である。

ここでのキャリアインタビューの目的は、「身近な先輩の歩んできた道を学ぶことで、自分自身のキャリアを考える」ところにあるが、とくに自分の就職活動の前に親の仕事に関する考え方を知ること、親とのコミュニケーションをはかること、親から自分の就職活動へのアドバイスをもらうことである。最も身近な人生の先輩でもある親のキャリアを学ぶことで、自分自身のキャリアを考えて就職活動へのきっかけづくりとなることを期待している。平尾[2004]は、大学生の就職活動において親の存在が大きいことを指摘するが、そうであれば親とのコミュニケーションを円滑にすることで学生の職業意識を高めることができ、就職により前向きに取り組むことができるのではないかと考えられるからである。

課題レポート「キャリアインタビュー」の説明のために学生へ配布した資料(抜粋)は表1である。課題は「人生の先輩1名にキャリアインタビューをし、レポートせよ」というものであり、親に限定しているわけではない。A4紙一枚との限定はつけたものの、

「Q & A方式で書いても、取材記事風に書いても、どちらでも可書き方は自由である」として、書き方は学生に工夫をさせた。発表・討論をするものではなく、レポートを提出するのみとした<sup>3)</sup>。

レポートに必ず盛り込む内容として表1の「内容」に記載される4項目を指示し、かつ、インタビューを行った自分自身の感想を記載するように求めた。ただし仕事の内容については必ずしも書かなくてよいことを口頭で補足した。質問項目の4番目は、これから就職していく「私」へのアドバイスである。ほとんどのレポート提出者はアドバイスをもらい、その内容は「とにかく好きな道に進みなさい」や「大学時代にいろんな経験をみなさい」など様々であった。また、レポートの最後にインタビューを終えての感想を記載することを求めたが、ここには、就職を考えるよい機会となったという肯定的な意見が多かった一方で、「親が真剣に答えてくれなかった」「別の人にすればよかった」という相手にかかわる問題、「インタビューが難しかった」「書き方がよくわからなかった」というレポート執筆の問題も寄せられた。

この課題はゴールデンウィーク前に提示し、連休の帰省でインタビューすることを想定して締切を5月12日とした。ただし様々な事情が考えられるため保留を申し出たものについては7月28日まで提出の延期を可能とした。実際、「6月に教育実習で実家に帰るのでそのときにインタビューしたい」「親が海外出張中なので延期したい」などの申し出があり、すべて認めた。親へのインタビューにはこのような配慮が必要であり、期間的余裕をもって課題を出す必要がある。

山口大学で実施したキャリアインタビューは、先に紹介した2つの高校の実践例で言えば、柏日体高校のパターンである。ただし、大学生と高校生の違いなどにもない以下の点について工夫をした。すなわち4月28日の

講義の説明では、「インタビュー相手は親でなければならないというわけではないが、就職活動を目前に控えた時期でもあるので、親を勧めたい。ただし人選は評価の対象ではない」ことを口頭で補足した。親に限定しなかったのは、大学生であるため親と同居していないケースが多いこと、なんらかの事情によって親と仕事の話ができない(したくない)ケースに配慮したためであり、対象を強く限定するとレポート作成自体が不可能となることが予想されたための措置である。また、

人選には困難が発生するかもしれないとの懸念があったため、どうしても相手が見つからない場合はこの講義の担当教員である筆者がインタビューを受けることを伝えたと、結果的に人選に関する相談はまったくなく、すべての学生は相手を自分で見つけてきてインタビューを行った。

このキャリアインタビューの実施が学生のキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのだろうか。以下では、この点を検証したい。

表1 キャリアインタビュー課題文書

総合科目「就職」	2004.4.28
中間レポート(その1) キャリアインタビュー	
課題: 人生の先輩1名にキャリアインタビューをし、レポートせよ	
目的: 身近な人生の先輩の歩んできた道を学ぶことで、自分自身のキャリアを考える	
相手: 父親・母親を最優先に、祖父母、兄弟姉妹、親戚、知人も可 または、自分が将来就きたい仕事をしている人、現在仕事に就いていない人でも過去に職業経験があれば可 どうしても相手が見つからない場合は、私(平尾)がインタビューを受けます。 が、これは最終手段にしましょう 自分の家族以外にインタビューしたい方は、人選の相談にのります	
内容: インタビューに必ず盛り込むべき内容は、 今の仕事の内容およびこれまで取り組んできたこと(キャリア) どうしてこの仕事を選んだのか この仕事に必要な能力・仕事のやりがい これから就職していく「私」へのアドバイス である(他のものが含まれていても可)。このほか、 今回のインタビューを体験しての感想 をお書きください	
提出: 5月12日(水)の講義に持参し、講義終了時に提出のこと	
特例事項: 相手の都合(親が海外出張中で連絡がとれない、来月帰省するのでそのときにじっくり話をしたいなど)で、提出日に間に合わない方は、いつ、誰にインタビューする予定なのかを明記したレポートを5月12日に提出してください。保留を認めます。ただし、7月28日の講義最終日までに提出のこと。	

注) 学生配布資料から主要箇所を抜粋したもの

#### 4. キャリアインタビュー実施者へのアンケート調査

提出延期者の多くが提出し終えた7月7日にアンケート調査を実施した。当日の出席者に調査票を配って趣旨を説明したうえで回答を求め、その日の講義終了後に回収した。なお、対象は当日までにインタビューを終えた者のみとして無記名で回答を求めた。

回答者は299人で、学部・学年は以下のとおりである。なお、回答者のうち男子学生は54.2%、女子学生は41.1%、性別無回答が4.7%であった。

以下、この調査を通じてわかったことを順に記述していく。

##### 4-1 インタビューの相手

このような課題設定では、学生たちは誰をインタビュー相手に選ぶのであろうか。最も多かったのは、父親49.8%、次に母親19.4%であり、あわせて69.2%が親にインタビューした。兄弟姉妹、祖父母をあわせて82.9%がインタビュー相手として家族を選んでいる。

年齢が近くて話しやすいこともあるだろうが、兄姉にインタビューした学生が多かったのは予想外であった。

先に述べたように今回は親へのインタビューを推奨したものの強く求めたものではない。このためもあって、本来の趣旨である「親」以外が30.8%を占めたことは今後の課題として浮かび上がってくる。もちろん親以外のインタビューに価値がないというわけではない。働く大人へのインタビューによって多くのものを得てきており、これはこれで成果があったと考えている。このアンケートでは対象を選んだ理由までは問わなかったが、親以外を選んだ学生何人かに確認したところ、「親よりもっと聞きたい人がいた」「親のことは知っているので別の人を知りたいと思った」などの理由であった。

以下では、論点をより明確にするために父母をインタビュー相手に選んだ207人の集計結果に基づいてキャリアインタビュー手法の効果と問題点を考察したい。

表2 アンケート回答者の学部・学年

学部	人文	15 (5.0)	学年	3年生	271 (90.6)
	教育	17 (5.7)		4年生以上	17 (5.7)
	経済	156 (52.2)		無回答	11 (3.7)
	理学	111 (37.1)			
	合計	299 (100)		合計	299 (100)

( )内は回答者総数299に占める割合(%)

表3 インタビューの相手

父親	149 (49.8)	山口大学の教職員	4 (1.3)
母親	58 (19.4)	アルバイト関係者	13 (4.3)
祖父母	2 (0.7)	サークル関係者	4 (1.3)
兄弟姉妹	39 (13.0)	その他	23 (7.7)
親戚	7 (2.3)	合計	299 (100)

( )内は回答者総数299に占める割合(%)

#### 4-2 インタビューの方法

この課題を提示したときには直接対面して話をする事しか想定をしていなかったが、学生が提出するレポートをみると他の方法が存在することがわかってきた。インタビューの方法として以下の選択肢で質問したところ、直接対面が47.3%で最も多いものの、電話が31.9%あった。ほかに電子メールが11.6%、手紙・文書が9.2%であり、約2割の学生が言葉による会話ではなく文字によるやりとりでレポートを作成している。課題の紙を実家にFAX送信して回答を送ってもらったり、電子メールの返信をそのまま貼り付けてきた、ほとんど親が書いたとみられるレポートが存在したのも事実である。電子メールの活用が悪くはないが、より効果をあげるためにはオリジナルな質問項目を含むようにすることや親の返答メールを自分なりに解釈することなど指示する必要があったかもしれない。

#### 4-3 レポート作成時間

「レポート作成の時間はどのくらいかかりましたか? インタビューに要した時間およびあなた自身の構想・執筆の時間の合計でお

答えください。移動時間は含みません。」との表現でアンケートでは具体的な時間を記入させた。無回答5名を除く202名の平均は2.4時間である。おおむね2~3時間で作成しており過重な負担を学生にかけているわけではない。むしろ気軽に気楽に取り組んだ感が強い。

#### 4-4 インタビューの実施

インタビューの方法と感想に関する表6の7項目について、①そうである、②ややそうである、③どちらでもない、④ややそうでない、⑤そうでない、⑥わからないの6選択肢にて回答を求め、このうち①②を肯定回答、④⑤を否定回答、③を中間回答として集計した。

はたして親は、このようなインタビューに快く答えてくれるだろうか。対象を限定しない場合は話してくれる人を選べばよいが、限定する場合にはインタビューを受けてくれるか否かは重要な問題である。アンケートによると87.4%は「インタビューの相手は快く引き受けてくれた」に肯定回答を示し、「インタビューの相手は丁寧に対応してくれ

表4 インタビューの方法

直接対面	98 (47.3)	電子メール	24 (11.6)
電話	66 (31.9)	合計	207 (100)
手紙・文書	19 (9.2)		

( )内は親にインタビューした回答者207に占める割合(%)

表5 インタビューの時間

1時間未満	7 (3.4)	平均値	2.4時間
1時間以上2時間未満	60 (29.0)	中央値	2.0時間
2時間以上3時間未満	64 (30.9)	最頻値	2.0時間
3時間以上4時間未満	43 (20.8)		
4時間以上5時間未満	13 (6.3)		
5時間以上	15 (7.2)		
無回答	5 (2.4)		
合計	207 (100)		

( )内は親にインタビューした回答者207に占める割合(%)

た」には86.5%が肯定回答であった。ただしこの両質問には否定回答がそれぞれ6.8%、6.8%存在し、「親がちゃんと答えてくれなかった」「こんなことなら別の人にすればよかった」とのやや苦情めいた感想も少数あったのは事実である。今回の課題は親に限定したわけではないので、親が快く応じない、または丁寧に対応しないことが予想される場合は別の人に相手を変えた可能性もあり、この点は「インタビュー相手の人選に困った」との問いに13.5%の肯定回答があることからもうかがえる。こういうケースの存在は留意しておくべき点である。

親にあらためて聞くのが恥ずかしかった・照れてうまく聞けなかったという点は、レポートの感想として少なからず寄せられた学生からのメッセージであった。アンケートでこの点を確認すると、「インタビューには照れがあった・恥ずかしかった」の肯定回答が37.7%であり、直接対面方式にてインタビューを実施した98名に限ってみると42.9%が肯定回答を示した。4割近くの学生たちが照れや恥ずかしさを乗り越えてキャリアについて親と話をしたことになる。だからこそ、あえてレポート課題とすることに意味がある。キャリアインタビューの手法は、親と仕事の話をする機会づくりとしての役割を持ち、その意義は大きいと言えるだろう。

今回の課題ではあらかじめ標準的な質問項目を準備したが、これ以外の質問も含んでインタビューするよう指示している。調査票には指定した4項目が、①今の仕事とキャリア、②仕事を選んだ理由、③必要能力・やりがい、④私へのアドバイス、であることを明記して、これ以外の質問をしたかを尋ねた。この点について「レポートの課題で指定されたもの以外の質問もした」を肯定する回答は27.1%に対して、否定回答は57.0%もあった。課題提供者の趣旨はこの項目を含めてもっと他のことを尋ねるようにとのことであったが、学生は「この項目を聞けば十分である」とらえる傾向が強いようである。

ところで、このようなレポート課題を学生自身はどのように感じたのだろうか。「インタビューは難しかった」への肯定回答は34.3%、否定回答は40.1%であって、難しいと感じた学生は3人に1人であった。またこのインタビューのひとつの重要な目的に、彼らのキャリア形成への貢献、当面の具体的な課題としては就職活動への貢献がある。「このインタビューの経験は自分の就職活動に役立つ」への肯定回答が70.0%であって、否定回答は7.7%に過ぎなかった。実際、学生の感想のなかには「就職活動について親と話す機会になってよかった」「親からアドバイスをもらったのがよかった」などの声が多数寄

表6 インタビューの実施

	肯定回答	否定回答	中間回答	わからない ・無回答
インタビューの相手は快く引き受けてくれた	87.4	6.8	4.3	1.4
インタビューの相手は丁寧に対応してくれた	86.5	6.8	6.3	0.5
インタビュー相手の人選には困った	13.5	76.8	8.2	1.4
インタビューには照れがあった・恥ずかしかった	37.7	41.1	19.8	1.4
レポート課題で指定されたもの以外の質問もした	27.1	57.0	12.6	3.4
インタビューは難しかった	34.3	40.1	25.6	0.0
このインタビュー経験は、自分の就職活動に役立つ	70.0	7.7	15.0	7.2

親にインタビューした回答者207に占める割合(%)

せられており、ひとつの目的は達せられた感がある。回答者のほとんどが3年生であって、これは就職活動前の自己評価である。本当に役立ったかどうかはわからないが、少なくとも本人にこのような意識を持たせることにキャリアインタビューの手法が役立つことが確認された。この点は意義あることと考えられる。

#### 4-5 インタビューによる変化

キャリアインタビューという手法を通じて学生たちのキャリア意識になんらかの影響を与えることができるだろうか。あくまでも自己評価であるが、以下の2つの質問を行った。

まず、「今回のキャリアインタビューで、新たな発見がありましたか?」の問いに対して、「あった」と答えたものが60.4%、「なかった」と答えた者は38.2%である。「あった」と答えた者には具体的内容の記載を求めた。そこには「親の職業観を知った」「親が転職をしていたことをはじめて知った」「私の就職に関する思いを知った」などの記述がなされている。親自身の職業に関して知らないことを知ったという事実のほか、親の考え方を知ることができたとの指摘は多くあった。親とのコミュニケーションを円滑にするという点で、効果をもたらすことができたと考えられる。

また、「今回のキャリアインタビューで、自分の考え方の変化はありましたか?」の問いに対して、「あった」との回答が35.7%、

「なかった」との回答が62.3%である。ただか一度のインタビューで考え方が変わるほどの効果を期待するにはやや無理があるが、それでも3人に1人は変化があったと回答した。記載された変化の具体的内容は、「就職意欲が高まった」「やりたいことをやるのがよいことがわかった」などである。親とのコミュニケーションが職業意識の向上に役立つ可能性が示されている。

#### 4-6 インタビューの感想

アンケートの最後には、キャリアインタビューを経験した感想を自由記述方式で求めた。全体的には肯定的意見が多いものの、ここでは、この手法の課題を抽出するために、あえて否定的な記述に注目したい。これらをまとめると表8のように整理することができる。

「親とは時代が違うので・・・」「親の職業はなりたいた職業ではないので・・・」との感想が複数出されたのは、このインタビューは職業研究ではないという趣旨がうまく伝わっていなかった証拠である。また、「親の仕事はよく知っていたので・・・」は、比較的多かった否定的感想である。このインタビューは親の仕事を知ることには意義があるのではなく、親のキャリアから自分が学ぶということが、うまく理解できていなかったようである。なかには「小学校のときに答えたことと変わってない」と親から言われて納得した」と感想もあって、就職活動を目前に控えた今聞くべき

表7 インタビューによる変化

新たな発見		自分の考えの変化	
あった	125 (60.4)	あった	74 (35.7)
なかった	79 (38.2)	なかった	129 (62.3)
無回答	3 (1.4)	無回答	4 (1.9)
合計	207 (100)	合計	207 (100)

( )内は親にインタビューした回答者207に占める割合(%)

表8 インタビューの感想（否定的なもの）

- ・親とは時代も職種も違うので参考にはならなかった
- ・親の職業はなりたい職業ではないので、まじめに取り組みなかった
- ・親の仕事はよく知っていたので意味がなかった
- ・ありきたりな答えしか返ってこなかった
- ・指定された項目以外何を聞いていいのかわからなかった
- ・面倒くさがってなかなか質問に答えてくれなかった
- ・親が真剣に答えてくれなかったので、よくなかった

この理解が薄かったのかもしれない。課題の趣旨をより明確に伝えていかなければならないことは、今回の反省点でもある。

「ありきたりな答えしか返ってこなかった」「指定された項目以外何を聞いていいのかわからなかった」は質問力の問題とも言えるだろう。今回は講義のなかでインタビューの方法に関する指導は行っていないが、この点については事前指導が必要と考えられる。

さらに、親がちゃんと答えてくれなかったという種の感想が複数寄せられたが、この点は課題を設定する側にとって、いかんともしがたい問題である。今回のキャリアインタビューの実施を通じてわかったことは、こうしたケースが現実には発生することであり、このことを念頭においた課題づくりは確かに求められている。

## 5. 結論

本稿は、キャリアインタビューというキャリア教育手法の有効性を検討するため、山口大学での実践を報告するとともに、課題を体験した学生へのアンケート調査の結果を分析し、考察を行った。全体的な結果として、この手法は少なからず自身のキャリア意識に変化をもたらすことができたとと言えるだろう。キャリアインタビュー手法の有効性が確認されたものと考えている。

今後、このような手法は様々な段階でのキャリア教育に活用されるべきと考えるが、少なくとも山口大学の実践において、以下の

課題が明らかになってきた。

冒頭に述べたように、対象は親なのか、それとも職業人なのか、ターゲットを明確にすべきである。山口大学の実践では、インタビュー相手として「親」を意識したものであったが、一方で、授業の課題であるかぎり親に限定するのは望ましくない。現実的な選択として今回とった手法は妥当なものであったと考えられる。ただし、より目的をはっきりさせて効果をあげていくためには普段から職業についてよく話をする親であっても、あらためてインタビューすることの意義を説明する必要があるだろう。また、この点に関して、親が答えてくれないケースは少数ではあるが存在することを認識しておくべきである。

「親の仕事は知っているのに意味がなかった」との感想をもった学生がいたことは、明らかに課題の趣旨が伝わっていない。今回のインタビューの目的は「親の仕事をレポートする」ところにあるわけではない。親へのインタビューを通じて自分自身のキャリアを考えるとところにある。課題の説明にそれほど時間をかけたわけではなく、説明資料を配布して「インタビューのさいは趣旨を説明して話をうかがうこと」などいくつかの補足説明した程度であった。こうした点がうまく伝わっておらず、指定された質問への回答を書くのが課題ととらえた学生がけっして少なくなかった。この点は反省点である。

このほか、取材をして書くという行動に対して、学生の個人差がかなり大きいことは提出されたレポートを見てわかったことである。

インタビューの仕方・書き方に関する指導はより丁寧に行うべきであった。これは大きな反省点である。それから、今回まったく想定外の出来事として、インタビューに電子メールを活用した学生の存在がある。電子メールをコミュニケーションの手段として認めるべきかどうかは、課題設定において明確にしておくべきだろう。この点について、筆者は認めるべきと考えている。ただしそのさい一回のやりとりで終わるのでなく、疑問点を正し、より深く尋ねるために繰り返しメールのやりとりを行うようなインタビューの方法を事前に指示しておくことが効果的と考える。

今回のキャリアインタビュー手法の山口大学における実践では、親とのコミュニケーションを図るという目的はほぼ達成できたのではないと思われる。筆者は低学年を主対象とするキャリア教育も担当しているが、このキャリアインタビューの課題はあえて高学年向けとして実施した。親との円滑なコミュニケーションを図って就職活動につなげていくという観点からこのほうが望ましいと考えており、次年度も引き続き実施するつもりである。

以上、指摘した点を改善しつつ大学生のキャリア教育手法としてのキャリアインタビュー手法をさらに充実させていきたいと考えている。

(学生支援センター 助教授)

注：

- 1) インタビュー相手をさがせないという生徒の声には、「できるだけ自分でやらせる。親や友達の力を借りる」としたものの、一部は担任の知り合いを紹介するなどの苦労話もここに

は紹介されている。なお、このインタビューでは、報告シートに「保護者からの一言」の欄を設け、職業を考える活動を親子で共有できるよう工夫されている。

- 2) キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議の報告書では、「かつての子どもたちは、保護者の働く姿を否応なしに目にし、そこから多くのことを学んでいた。今日、そうした状況は大きく変化し、保護者の働く姿を見る子どもは非常に少なくなっている。こうした変化が子どもたちの勤労観、職業観をはぐんでいく上で、大きなマイナス要因になっていることは、これまでも指摘されてきたところである。」との現状認識のもとに、家庭の役割の自覚を保護者にも求めている。
- 3) キャリアインタビューを実施した後の質問やコメントを求める学生の声に対しては、毎回の授業のミニレポート(出席カードに類するもの)に記載させて個別に電子メールで回答することとし、実際に電子メールにてやりとりをした。

<引用文献>

- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書『児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために』, 2004.1
- 小森昭文「総合的学習の時間に使った「進路探索とキャリア・インタビュー②」」, 月刊学校教育相談(ほんの森出版), Vol.16, No. 8, 2002.7, pp.78-82
- 斎藤剛史「保護者へのキャリアインタビューが進路意識を高め、親子の距離も縮めるー千葉・私立 柏日体高校」, Career Guidance(リクルート), No. 3, 2003.10, pp.44-45
- 平尾元彦「大学生の就職活動に関する親の意識ー山口大学3年生の保護者アンケート調査ー」, 大学教育(山口大学大学教育機構紀要), Vol.1, 2004.4, pp.103-113